

令和6年度「心の輪を広げる体験作文」 広島県推薦作品が優秀賞（内閣府特命担当大臣表彰）・佳作 を受賞しました

伝達式：令和6年12月26日(木) 15時00分～
広島県庁北館2階 第1応接室

1 概要

12月3日から9日までの「障害者週間」の取組の一環として、内閣府並びに都道府県及び指定都市が主催する「心の輪を広げる体験作文」において、**広島県推薦作品が中学生部門で優秀賞（内閣府特命担当大臣表彰）、高校生部門で佳作を受賞しました。**

令和6年12月26日に広島県庁にて賞状伝達式を行うため、貴メディアで御取材いただきますようお願いいたします。

なお、広島県からの推薦作品での入賞は7回目で、県内から複数作品が同時に受賞するのは初めてです。

2 受賞者及び受賞作品について

(1) 優秀賞（内閣府特命担当大臣表彰）受賞

受賞者：藤本 暁（ふじもと こう）さん（盈進中学校3年生、14歳）

受賞作品：「ハンセン病患者と触れ合って ～過ちを繰り返さないために私ができること～」

(2) 佳作受賞

受賞者：山城 美緒（やましろ みお）さん（盈進高等学校1年生、15歳）

受賞作品：「学んでほしい。考えてほしい。」

※内閣府HPに全文が掲載されていますので、下記リンクから御覧ください。

[令和6年度「心の輪を広げる体験作文」「障害者週間のポスター」入賞作品集 - 内閣府 \(cao.go.jp\)](https://cao.go.jp)

3 伝達式について

- (1) 開催日時 令和6年12月26日(木) 15時00分から
- (2) 開催場所 広島県庁北館2階 第1応接室
- (3) 表彰者 知事 湯崎 英彦

(参考)「心の輪を広げる体験作文」について

- ・趣 旨：障害者に対する国民の理解の促進を図るため、国民を対象に、「出会い、ふれあい、心の輪—障害のある人とない人との心のふれあい体験を拡げよう—」をテーマとして作文を公募。
- ・募集部門：小学生部門，中学生部門，高校生，一般部門の4区分
- ・選定方法：都道府県から広く作品の募集案内を行い，都道府県において各部門1作品を選考し，内閣府に推薦。内閣府において最優秀賞等の入賞作品を選定
- ・入 賞：各区分につき，最優秀賞1点，優秀賞3点，佳作5点
- ・今年度応募状況
全国応募総数 1,383編（中学生区分 553編、高校生区分 464編）
内，都道府県及び指定都市推薦作品 117編（中学生区分 37編、高校生区分 27編）
の中から入賞として各区分9編を決定

(過去入賞状況)

年度	表彰	部門
令和4年度	佳作	小学生
令和3年度	優秀賞	高校生
令和2年度	最優秀賞	高校生
令和元年度	佳作	中学生
平成29年度	優秀賞	高校・一般
平成28年度	優秀賞	中学生

ハンセン病患者と触れ合っ

〜過ちを繰り返さないために私ができること〜

盈進中学校 三年

藤本 暁

私は中学一年生の時からある場所に通い続けている。それはそこに、私の会いたい人がいるからだ。

その人とは国立ハンセン病療養所長島愛生園に暮らす田村保男さん(92)だ。彼は高校生で長島愛生園に入所した。私が田村さんに出会ったのは長島愛生園にある病院だった。とても優しい人で笑顔がすてきな方だ。しかし田村さんもハンセン病に対する差別の被害者だ。ハンセン病患者は人からも社会からも差別された。ハンセン病に感染すると手足が麻痺し顔が歪むことがある。その見た目から差別や偏見を受け続けてきた。地域から感染者をあまり出し、見つけ次第療養所に強制収容させることを定めた。それが「らい予防法」だ。ハンセン病患者を自分達の町から排除させるように「官民一体」となり徹底して強制収容させた。それが「無らい県運動」だ。この事実を知った時、二度と繰り返してはならないことだと強く感じた。

田村さんは妹がいる。彼にとって大切な存在の妹も、田村さんと同様に差別された。ハンセン病に対する差別

は決して患者だけでなく、その家族も差別の被害者だった。田村さんは悔しそうに語った。「わしがこの病気になって中学生の妹は、病気じゃないのに、『来なくていい』と学校に言われた。卒業証書ももらっていない。わしが病気になったから妹も病気になるはずだと学校も友達も妹を避けた。トイレもまともに使わせてもらえなかった。あまりにひどい差別だから誰にも言えなかったんだよ。自分が強制収容されたことより、妹が受けたいじめと差別はどうしても許せんよ。」私は心が締め付けられた。クラス内だけでなく、学校側までも差別に加担したのだ。それほど「ハンセン病はうつる病気だ」という誤った認識が広がっていたのだ。

転校した小学5年生の頃、私自身も仲間外れにされた経験がある。当時の私は、昼休みでもみんなが遊んでいる風景を眺めることしか出来なかった。「このまま卒業するのかなあ…」と不安を感じていた。そんなある日、教室で遊んでいた何人が私に「一緒に遊ぼう！」と声

その思いを伝える側になる。」

をかけてくれた。嬉しくて叫びたかった。その時の友達とは今でも仲が良い。当時の私と田村さんの妹とは重なる点があるように思う。彼女は「ハンセン病患者の妹だから」、私は「転校してきたから」という理由で仲間外れにされた。妹の話聞いた時、その悲しみや苦しみが当時の経験と重なり、胸が苦しくなった。私にはそんな友達の存在があった。その存在は、私にとって心強いものだった。だからこそ、あの時の友達が私にしてくれたように、私も誰にでも優しく出来る人になりたい。中学生になった私は、少しずつ積極的に仲間作りをしようと思いがけた。中学三年生になった今、友達は私にとってかけがえない存在だ。あの時声をかけてくれた友達に少しでも近づけたらどうか。あの時の自分と似たような境遇の子がいたら、勇気を出して声をかけることが出来るだろうか。一緒に何かしようと誘われたら、誰だって嬉しいはずだ。これから学校生活、社会生活を送っていく中で、以前の自分のように一人でいたり、いじめを受けている人がいたら、相談に乗り、自分から話しかけて、最終的には笑い合える仲間になる。そのきっかけとなる行動を私はしていく。

田村さんのお話を聞いた後、「二度と同じ思いをする人がいなくなるように。」と握手を交わした。その時私は、「このように思った。」「次は、私達が田村さんの人生と、

学んでほしい。考えてほしい。

えいしん 盈進 中学高等学校 一年
やましろう 山城 美緒

「旧優生保護法は違憲である」。今年七月、最高裁判所は「国は長期間にわたり障害がある人などを差別し、重大な犠牲を求める施策を実施してきた」と明言した。その法律は優性な遺伝子は保護し劣性な遺伝子は排斥する。つまり、法が障がい者を否定し差別していた。ハンセン病患者の方々ももれなくその差別の対象だった。

ハンセン病は本来、感染力は極めて低く、まして遺伝する病気ではない。ハンセン病が流行った当時は、衛生環境が良くなり、子どもや高齢者など免疫力の低い人たちに感染していった。感染すると、足先や指先の感覚が麻痺する末梢神経障害により、火傷や怪我などに気づかなくなる。また、病気の進行により運動障害や変形があらわれる。国は「らい予防法」によって、ハンセン病がうつる病気だと嘘の情報を流し、ハンセン病患者は恐れられ、差別され、隔離されたのだ。

私が所属するクラブ活動では、岡山県の長島にある国立（ハンセン病）療養所長島愛生園を訪れ、ハンセンのナンバーの車に傷を付けたり、医療従事者への誹謗中傷が起きたりした。私が小学六年生だったときに、隣の小学校でコロナに感染した児童がいじめられ、転校したという話を聞いた。全国的にも似たような事例があることをニュースで知った。私もコロナに感染したことがあるが、周りの人たちから全く差別などはされなかった。いじめられ、転校した子と私との違いは、周囲の環境の違いだ。私の周りにいた人は、コロナに感染した私を心配して優しく声をかけてくれた。しかし、その子の周りの人たちは、自分がコロナに感染したくないという恐怖心と、不確実な情報から、何も悪くないはずの子がコロナに感染したことを責め、いじめたのだろう。コロナは大抵の人が数日すれば症状が治まる。そして、今はワクチンや症状を抑える薬も開発された。流行り始めた当時、コロナに対して必要以上に人々が恐れた原因は、何よりも「正しい情報」がわからなかったことだと考える。まさしくハンセン病差別の二の舞だ。

ハンセン病は人々を身体的にも、精神的にも苦しめてきた。しかし、本当に恐ろしいのはハンセン病ではなく、人間の「差別心」だと思う。人は誰でも差別する心がある。人々は無意識に「未知に対する恐怖」を排除しようとする。しかし、私は全ての人にハンセン病療養所に訪れてもらい、一緒に考えたい。自らの目で見て、肌

病問題から生きる意味を学んでいる。そこでは、ハンセン病の子どもたちが通う岡山県立邑久高等学校「新良田教室」や、手足が不自由な子どもたちが安全に歩けるよう整備された「朗道」など、当時ハンセン病患者の方々が利用していた場所を見学することができる。その施設のひとつに「回春寮」がある。ハンセン病患者が長島に連れてこられたら最初に入れられる建物だ。そこで衣服を脱がされ、クレゾールの入った消毒風呂に入れられ、全身を消毒される。ある入所者の方は「身体検査をされたときが一番悔しかった。いよいよ長島にきたな。帰られないなと思った」と語った。そこに訪れるたびに私は、連れてこられた人たちへの差別はここから始まっていたんだと実感し、彼らの気持ちを想像し、胸が抉られる。

私はハンセン病問題を知るよりも前に、同じような差別を知っていた。それは「コロナ差別」だ。日本で徐々にコロナウイルスが流行り始めたころ、感染者の出た県で感じ、ハンセン病患者の方に対してどんな差別があったのか。なぜその差別が起きたのか。もし自分がハンセン病患者だったら、友達やハンセン病になったら……。コロナウイルスに関しては、社会や保健体育の教科書で様々に記載されている。しかしハンセン病は、教科書にほとんど載っていない。実際私は「ハンセン病」という言葉をクラブに所属して初めて聞いた。きくと、ハンセン病について知らない若者は多いと思う。知らないままでは、また同じことを繰り返してしまう。差別があったという事実を私たちは知らなければならない。

私の高校は中高一貫校であり、中学生は、「にんげん学」という授業がある。高校三年生の先輩が、ハンセン病回復者から学んだ心の傷や彼らの体験などをもとに、中学一年生に授業をする。私も中学一年生のとき、その授業を受けた。その中で、先輩から学んだ言葉がある。「正しく知って、正しく行動する」。これは先輩方が出会ったハンセン病回復者の一人、金泰久（キムテグ）さんの言葉だ。差別の根源は「未知に対する恐怖」だが、それに打ち勝つには正しい知識が必要なのだ。だから私はハンセン病問題から学び続け、正しく行動したい。

私には、学んだことを後世へ伝えていく活動を一緒にできる仲間がいる。これからもずっと、そんな優しいハンセン病回復者の方々から、仲間たちとともに学んでいく。